



## はじめに

鹿児島県青少年海外協力体験事業も今年で4回目を迎え、ここにその報告書「Apa Kabar Desa Pasir Kaliki, (こんにちは, パシールカリキ村)」を発表することになりました。

前回まではマレーシアでの協力隊体験を実施しましたが、今回はインドネシアを訪問地として選び、協力隊体験をしてもらいました。インドネシアでの体験は初めての試みで、今までどおりの感銘を若い人達に与えることができるか、多少の危惧はありましたが、成功のうちに終了することができました。このことは大きな喜びであり、御尽力いただいた方々への感謝でいっぱいであります。

体験事業の目的は、現地で活躍している青年海外協力隊員の活動ぶりを見、体験してもらうことで、日本の国際協力の現状を理解し、国際的視野を広げることであり、また、ホームステイや学校訪問等を通して、インドネシアの人々との交流を深め、異文化を理解し、真の地球人としてこれからの鹿児島はもとより日本や世界の国際化のために働く若者を育てたいということでもあります。

今年も例年どおり多数の応募者があり、そのうち9名の中学生、高校生を選出させていただきました。中・高校生達はこの体験で、私達が期待した以上に感激し、多くのことを学んで帰りました。その様子はこの報告書を通して皆様に伝わってくるものと信じます。

世界を見回しますと、ルワンダの難民問題や国連平和維持活動(PKO)等、いまや日本は国際協力国としての責務を果たすべく、世界中から期待されています。少しでも多くの若者がこのことに関心を持ち、何らかの形で国際貢献に携わっていただきたいとの希望のもとに、この報告書が刺激の一つになれば幸いに存じます。

最後に、この事業の実施に御協力いただきました国際協力事業団、青年海外協力隊事務局、青年海外協力協会をはじめ、関係機関団体、の方々に厚くお礼申し上げます。また、現地で御尽力いただいた各機関団体やホームステイ先の方々に心より感謝申し上げます。

今後とも、この意義ある体験事業を継続できることを希望し、関係方面の一層の御指導、御支援をお願い致しまして、事業報告の御挨拶とさせていただきます。

平成6年11月1日

鹿児島県青少年海外協力体験事業実行委員会  
会長 島藤佳子

# インドネシア共和国略記

[位置図]



## [主要指標]

総面積：1,905,000km<sup>2</sup>

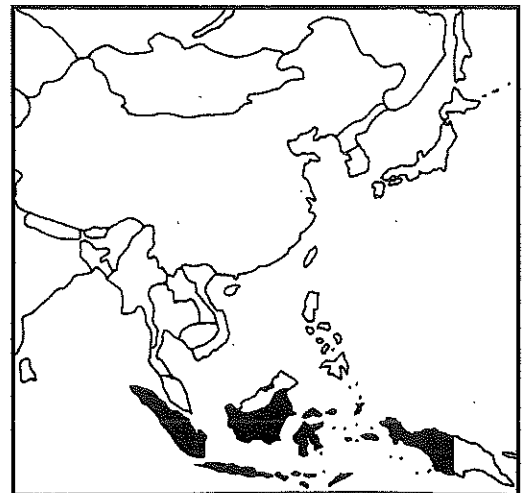
総人口：18,138.8万人 (91年)

主要民族：ジャワ族, スンダ族,  
ミナンカバウ族

国民総生産：1,114.1億ドル (91年)

一人当りの国民総生産：610ドル

経済成長率：5.8% (80~90)



# 目 次

◆はじめに		
◆インドネシア共和国略記		
◆ごあいさつ		
鹿児島県総務部国際交流課長 宿口 豊城 .....		1
◆事業概要 .....		2
事業趣旨		
事業主体		
訪問団員名簿		
訪問日程		
◆行動の記録 .....		5
◆訪問手記 .....		12
1人の「地球人」として	貴 島 祐 .....	12
教育の大切さ	内 藤 真 帆 .....	16
「ものさし」	松 元 隆 浩 .....	19
人々の「あたたかさ」にふれて	今 村 沙 織 .....	21
パシールカリキ村での生活	河 野 友 亮 .....	24
私の貴重な体験	松 村 む つ み .....	26
「彼らといっしょに」	向 江 智 生 .....	28
心のやさしさを感じて	倉 岡 智 恵 子 .....	31
僕が得たもの	安 栖 尚 幸 .....	34
◆第4回体験事業を終えて		
訪問団団長 小城 善政 .....		38
◆事業関係の新聞記事 .....		39

## ごあいさつ

鹿児島県総務部国際交流課長

宿 口 豊 城

第4回鹿児島県青少年海外協力体験事業の御成功を心からお喜び申し上げます。

この体験事業は、青年海外協力隊の活動現場に本県の青少年を派遣し、開発途上国の人々の新しい国づくりに協力している隊員と一緒に実際の活動を体験するとともに、ホームステイにより派遣国の皆さんと生活を共にしながら、相互の生活、風俗、習慣、文化等を理解することを目的として、他県に先駆けて始められ、今では各方面から大きな注目を浴びています。

この体験事業に参加された皆様の御報告をお聞きしますと、若者の純真な気持ちや溢れる情熱を強く感じるとともに、国際性豊かな青少年が着実に育ってきていることを実感いたします。

私たちにできる「国際協力」には様々なものがありますが、その中でも、青年海外協力隊活動は、派遣先の国々の人々と直接触れ合うことができる身近な国際協力のひとつです。

若い時代に異なる文化・価値観を体験することの素晴らしさは、この体験事業に参加された皆様がそれぞれ体験されたところであり、この貴重な経験を一つの糧として今後の人生に生かしていただきたいと思います。

鹿児島県は、現在、青年海外協力隊の支援、海外技術研修生等の受入れ、鹿児島の青年の海外への派遣、香港、シンガポール及び韓国全羅北道との交流会議の開催など、「世界に開かれた南の交流拠点」として国際交流・国際協力を積極的に推進しています。

また、今年の4月には、民間国際交流の拠点施設として「アジア・太平洋農村研修センター」を鹿屋市の大隅湖畔に開設しました。今回の体験事業に参加された皆様も出発前の研修に同センターを利用していただきましたが、今後とも、同センターの有効活用を図りながら、地域レベルにおける国際交流・国際協力を更に進めてまいりたいと考えています。

最後に、この事業を実施された青年海外協力隊鹿児島県OB会、鹿児島県青年海外協力隊を支援する会及び財団法人鹿児島県国際交流協会、並びに、この事業の実施に当たり御支援・御協力をいただいた国際協力事業団及び青年海外協力隊の皆さんに心から敬意を表するとともに、この事業の今後一層の充実、発展をお祈りいたします。

# 事業概要

## 事業趣旨

鹿児島県の青少年が、開発途上国で国づくりに貢献している青年海外協力隊員の活動現場を訪問し、その技術援助活動や、そこで繰り広げられる隊員と現地の人々との交流と一緒に体験することにより、国際協力に対する理解を深めるとともに訪問地と鹿児島との親善を深める。

## 事業主体

主催 鹿児島県青少年海外協力体験事業実行委員会

〔 青年海外協力隊鹿児島県OB会  
（財）鹿児島県国際交流協会  
鹿児島県青年海外協力隊を支援する会 〕 三者で構成

後援 国際協力事業団九州支部・鹿児島県・鹿児島県教育委員会  
（社）青年海外協力協会・南日本新聞社・鹿児島新報社  
西日本新聞社・日本経済新聞社・読売新聞社・毎日新聞社  
朝日新聞社・南海日日新聞社・大島新聞社・NHK鹿児島放送局  
南日本放送・鹿児島テレビ放送・鹿児島放送・エフエム鹿児島  
鹿児島読売テレビ放送

協賛 （財）古謝育英会

協力 インドネシア共和国大使館・ガルーダ・インドネシア航空

## 訪問団員名簿

(訪問団員)

氏名	学校名	学年	住所	備考
河野友亮	出水中学校	2	出水市	
貴島祐	志學館中等部	3	垂水市	
今村沙織	北指宿中学校	3	指宿市	
倉岡智恵子	東谷山中学校	3	鹿児島市	
安栖尚幸	鹿児島第一高校	2	霧島町	
向江智生	加治木高校	2	菱刈町	
松元隆浩	市来農芸高校	3	鹿児島市	
内藤真帆	甲南高校	3	鹿児島市	
松村むつみ	国立南九州中央病院 附属鹿児島看護学校	1	鹿児島市	加世田市出身

(同行者)

氏名	所属	備考
小城善政	鹿児島県青年海外協力隊を支援する会理事	訪問団団長
永田良松	青年海外協力隊鹿児島県OB会	
栄めぐみ	青年海外協力隊鹿児島県OB会	
玉泉和江	(株)鹿児島放送	
田中優子	(株)南日本新聞社	
本田秀昭	(財)鹿児島県国際交流協会	

## 訪問日程

平成6年8月1日～平成6年8月7日

- |         |   |        |
|---------|---|--------|
| 8月1日(月) | 結団式(鹿児島空港出発ロビー内)<br>鹿児島空港発<br>福岡空港経由<br>デンパサール空港経由<br>スカルノ・ハッタ空港着(ジャカルタ)  | ホテル泊   |
| 8月2日(火) | 国際協力事業団インドネシア事務所を表敬訪問<br>ジャカルタ市内見学<br>[国立博物館見学]<br>[パティック工場見学]<br>ハリム空港発(ジャカルタ)<br>バンドン空港着<br>パシールカリキ村で歓迎式                                  | ホームステイ |
| 8月3日(水) | <u>JICAプロジェクト視察(BBI)</u><br>・種馬鈴薯の収穫体験<br>・質疑応答   | ホームステイ |
| 8月4日(木) | 現地高校(SMA BANDUNG 5)との交流会<br><u>ウヤタグナ視覚障害者リハビリテーションセンター視察</u><br>(宇野JOCV 隊員活動現場)<br>現地学生、IKA-JICAとの交流<br><u>「イ」点字印刷センター視察(後藤JOCV 隊員活動現場)</u> | ホームステイ |
| 8月5日(金) | Bio Farma 訪問<br><u>チョコレート牧場協力体験</u><br>・牛舎の清掃体験<br>JICA, JOCV 隊員との懇談会<br>お別れパーティ  | ホームステイ |
| 8月6日(土) | バンドン空港発<br>ハリム空港着, スカルノ・ハッタ空港発(ジャカルタ)<br>デンパサール空港着<br>市内見学  | ホテル泊   |
| 8月7日(日) | デンパサール空港発<br>福岡空港着, 発<br>鹿児島空港着   |        |



## 行動の記録

8月1日(月)

1日目

貴島 祐

いよいよ待ちに待った出発の日、空港での結団式で、Bahasa Indonesiaの自己紹介をした時はとても緊張した。それから、福岡国際空港で、ガルーダ・インドネシア航空862便に乗り、ジャカルタに向けて離陸。飛行機の中では、雲仙や沖縄が見えた。でも、僕は、飛行機酔いをし、後の方になると、それどころではなかった。機内食は、とてもおいしかったが、日本食だったのでびっくりした。デンパサールに到着して、ジャカルタに行く途中、日没直後の西の空が、真っ赤ではなく虹色だったのが綺麗だった。ジャカルタに着くと、ホテルカルティカプラザまでのバスの道中、ルワンセ、夜店、まったく日本とは違う建築様式を見て、インドネシアに着いたんだ!とい

う実感が湧いてきた。ホテルでは、日本人でインドネシアの男性に嫁いだ、旧姓ホコノハラさんが夫婦で面会に来てくださった。話を聞く中で、「ここで1つ覚えておいてほしいことは、日本とは物差しが違う、つまり、価値観が違うということです。みなさんの物差しが全て正しいとは限らない、もしかしたら、相手の方があっているかもしれない。だから、それぞれを色々な角度から見てほしい。」と言われた言葉が印象的だった。これは、これからの5日間のホームステイをする中で、一番大切なことなのかもしれないと思った。それから、南国の果物をごちそうになった。マンゴスチンやバナナがとてもおいしかった。しかし、サラットという果物はあまりおいしくなかった。聞くところによると、当たりはずれがすごいらしい。また挑戦したい。明日からは、ホームステイ! 今から楽しみだ。



8月2日(火)

2日目

向江 智生

朝はモーニングコールの前に目が覚めた。ベランダから外を見るとバス、高級車、タクシーそして一般車がけたたましくクラクションを鳴らしながら日本と同じく左側を走っていた。

予定していたバスがこないため、しかたなくジャカルタの街中を歩いてJICAインドネシア事務所まで行くことになった。おかげでジャカルタの街並み、朝のラッシュを肌で感じる事ができ、インドネシアに来たんだなあ実感した。ただ、東芝、ソニーの看板、日本車の多さには驚いた。

ジャカルタの朝は暑い。事務所では熊谷次長からたくさんの説明を聞いた。今、インドネシアでは教育問題が最大の課題であること、また、協力隊員のうち女性隊員の数が多いことが印象に残った。

昼間は市内を観光した。前に象の像があることから「象の博物館」として親しまれている国立博物館では、ジャワ原人の頭骨の化石を見て感動をし、日本の陶器がありなつかしさをおぼえた。また、ガンダーラ美術のような、石仏・仏具が所狭しと並べであり、その数に圧倒された。

パティック工場で、ホームステイをする時、マンディ(水浴び)のためのサロンを買った。定価が17USドルを12USドルで買うことができ、得をした気になった。

こんなに車が多いのに信号はほとんどな

い。それでも事故は少ないということだった。

独立記念塔で写真をとる。そこで、インドネシアの歴史を知ることができた。太平洋戦争後、日本軍がインドネシアから撤退してすぐ、オランダが占領を目指して侵攻したが、インドネシア人が独立と自由を得るために、他人のためじゃなく、自分たちの意志で戦い、1945年8月17日に独立宣言がなされた。この日はインドネシア全土でお祭りがあるそうだ。

バンドン空港に午後5時頃着。出迎えの人達と一緒にホームステイ先のパシールカリキ村へ出発した。インドネシアの夜はすぐに暮れてくる。まっくらの道を進むと、おさえていた不安がいきなり頭をもたげてくる。ホームステイはだいじょうぶだろうか、言葉は……。しかし、多くの村人から盛大な歓迎を受け、不安と緊張が少し安らいだ。

チャロンと呼ばれるインドネシア独特の楽器で奏でる音楽にあわせ、ヘドラというバンドン市内の高校生と一緒に踊る。10時頃まで歓迎を受け、インドネシアのお父さんエンバンさんと会う。その夜は何とかコミュニケーションをとることに成功。おみやげのせんすをととても喜んでくれた。



8月3日(水)  
3日目

今村 沙織

今日は朝5時に起きた。朝食をカメラにとっておいた。メニューは、白米、野菜スープ、魚のフライ、えびせんのようなもの、ジャワティなど。朝食の前にはじめてマンディ(水浴び)をした。とても寒く、少し違和感を感じた。

バスに乗って、種子バレイショを研究しているBBIを視察した。ホームステイをしている村も研究所のある所も標高が高く、とても涼しい所でインドネシアは暑い国と思っていたのに驚いてしまった。研究所のみなさんも「ここは過ごしやすい」と言っていた。

ここで、種子バレイショの収穫体験をした。今回は不作ということだったが、それでもたくさん収穫だった。インドネシアでは、今まで輸入した種子バレイショから農家が種子バレイショをとり、販売していたことから、管理がいきとどかなく、収穫

が少なかった。そこで、国産の種子バレイショを生産するため、このプロジェクトが始まったということだった。私たちが収穫したバレイショが国産の第4号の種子になるという。

昼食はインドネシアの特別製の弁当だった。日本とはやはり違っていただけおいしかった。

帰りに市場(パサール)へ行った。バッグと朝、夕が寒いので毛布を買った。その時値段交渉をして、安く買うことができた。

ステイ先に帰ったら、朝は一人だったが夕食はホストマザーとホストファザーといっしょに食べた。いろいろすすめられて困った。多少のことは身ぶり手ぶりで通じるので「もう食べられない」と手ぶりでしたらわかり安心した。

8時半頃、村の子供達と一緒に花火をした。子供達がとても喜んでくれた。彼らとの距離が一步近づいたような気がした。「もっとたくさん持ってくればよかった」と思った。



8月4日(木)

4日目

安栖 尚幸

今朝もまた、いつも定刻に流れる、あのコーランで目が覚めた。目覚まし時計がないので、ちょうどよいのだが……。

今日、最初にバンドンの「S・M・A・5」(バンドン第5高等学校)を訪問した。校舎に入って驚いたのは、天井の高さだった。玄関先では10m位ほど、教室では7~8mもありそうに感じた。僕らは3人1組になり、生徒会の人に校内を案内してもらった。彼らと英語で全て会話したが、彼らは日本のような試験のための英語でなく、英会話を中心とした授業を受けているのでごく自然にすらすらと話しかけてくる。僕はそれに頭をフル回転して答えるのがやっとだった。

彼らに案内された教室では、生物の授業を行っていた。教室に入ると、まず目についたのが国章であるガルダ(インド神話に登場する霊鳥)、大統領、副大統領の写真であった。これは図書館にも音楽室にも必ずかかっていた。イスに座りあらためて天井を見ると廊下で見た時よりさらに高く思えた。机に落書きするのは、万国共通なのだろうか、一面に書いてあったので、親しみをおぼえた。授業内容は日本より難しく思えた。最後にみんな音楽室に集まり僕らにジャズ風の「BUBY BULAN」「SUNDANESE SONG」の歌を披露してくれた。また、「サクラ、サクラ」をアングロンというインドネシアの伝統的な楽器で演奏してくれた。おかえしに団員全員で「ちわんむし」を歌うと、男の子も女の子もどっと沸いた。彼らと日本の生徒と違うのは、彼らの積極性だと感じた。もし

日本の学校に外国人が訪ねて来たとしても、彼らみたいに興味を示し、積極的に話しかけるだろうか。僕は見習わなければならないと思った。別れ際に彼らから学校の校章をもらった。「Whose?」と聞き、はずかしそうに手を挙げた女の子に僕はプロミスリングをあげた。最後にみんなで写真を撮り、「Remeber me, see you again. Sampai Jumpa」(僕を忘れないで、また会おう)と英語とインドネシア語を混ぜて言いながらバスに乗り込んだ。この後、宇野隊員が活動しているウヤタグナ視覚障害者リハビリテーションセンター、また後藤隊員の活動している「イ」点字印刷センターを訪問した。僕は彼らは真に国際協力に従事している人物だと思った。彼らは「現地のスタッフと同じような生活をし、心を通じあわせることが大事なんだ。それは、日本のやり方をいきなり文化、習慣の異なる現地の人に押しつけても、理解してもらえない。インドネシアのことを知り、日本のこともわかってもらう。この相互理解があってこそ1つのプロジェクトを進めることができる。」と言われた。僕は彼らの考え方、また、それを実行に移している姿をみて感動し、尊敬した。将来僕もこんな協力隊員になりたいと心の底から思った。



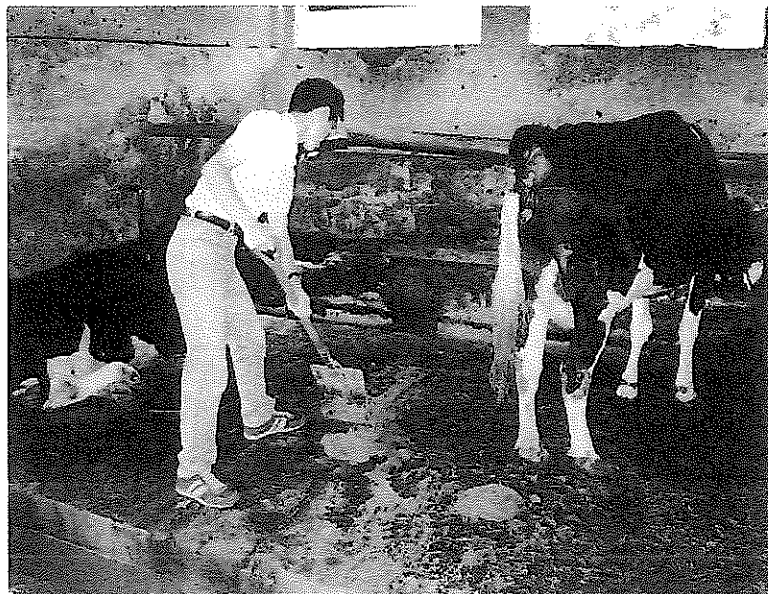
8月5日(金)

5日目

内藤 真帆

村の友人と以前から約束をしていた釣りに出かけた。朝4時半に起き、5時にプールへと向かう。意外とたくさん釣れる(私は一匹も釣れなかったけど……)。村の人も家から出て来て、ニコニコしながら眺めている。この村にももう長くは住めないと思うと、急に悲しくなってしまった。バスに乗り込み、チコレ牧場へと足を運んだ。そこでは牛フンをとったり、牛にマンディをしてやったり。しかし、何といってもごちそうになったトウモロコシと牛乳のおいしさは言い表せない。その後レストランに行き、調整員、隊員との懇談会が行われた。これまで聞けなかったことを教えてもらえたことが何よりうれしかった。また、久しぶりに日本人をたくさん見たような気がした。フェアウェルパーティはかなり盛大に行われた。ゆかたを着ていると、みんな集まってきて口々にほめてくれた。

おはら節はちょっと失敗したけれど村の人達と一緒に踊ることができて最高に楽しかった。ほんの短い間だったのに、いろいろな人と知り会えて、いろいろなことを話して、花火もしたし歌も歌った。思い出の一つ一つが宝物だ。そう思うと、涙がこぼれてきた。この日は最後の夜だということで、いつも仲の良かった村の友人二人と松村さん、向江君の五人で一時までずっと話をしたりゲームをして過ごした。写真もたくさん撮った。明日別れないといけなのだが信じられない。彼らがもっと一緒にいられたらいいのにと伝えてくれたので“また、皆でここに戻って来るね”と答えた。明日が来てほしくない。



8月6日(土)

6日目

松村 むつみ

最後の記念に早く起きマンディをしようと思っていたのに、やっと4時40分に目が覚めたため、朝のマンディをすることができずに残念だった。大急ぎで朝ごはんを食べたが、結局、最後まで家族と一緒にごはんを食べることができなかった。家族と一緒にバスのところに行くと、村の人がたくさん見送りに来ていた。たくさん言いたいことはあっても「テリマカシ、テリマカシ(ありがとう)」としか言えなくてもどかしい思いだった。別れが近づき、ママが泣きだしたため、私も胸いっぱいになり、涙がでてきた。「もう出発するよ」という声を聞いて、本当にお別れだと思うと、もう悲しくてたまらなかった。バスに乗り込んで、バスの中から手を振った。村が見えなくなると、しばらくは歓迎会のこと、初めてホームステイをして不安になったこと、マンディの冷たかったことなど、村での出

来事ばかりが頭の中をめぐって涙が止まらなかった。まだ、ママと抱き合った時、肩でママが泣いていた感触が残っている。

今日は一日中、移動だったが、飛行機やバスで移動するたび、村からどんどん遠くなっているのだと感じ、村がなつかしくてたまらなかった。明日になると、本当に村から離れてしまう、国が違ってしまうのだと思うと、とても寂しい。ホテルのプールの近くで水の流れる音が聞こえると、村のマンディ場の音とだぶり、村のことが頭からはなれなかった。今夜がインドネシアでの最後の夜だ。



8月7日（日）

7日目

河野 友亮

今日、デンパサールから、飛行機にのり、インドネシアを離れました。

余り寝ていないので、眠くてしかたなかった。それでも、窓から、だんだんインドネシアの陸が遠ざかっていくのを見ると、今までの事が思い出され、深いためいきが出た。緊張した結団式、初めての国際線、海外でのホームステイの不安、盛大な歓迎会、チコレ牧場での牛舎清掃など数え

ればきりがない。短い7日間であったが、この体験を生かし、自分で出来る国際協力の輪をすこしでも広げてゆきたい。（友達に協力隊活動を教えるとか……）

福岡空港に着き、まず初めに頭に浮かんだのは、この一週間忘れていた暑いという言葉だった。パシールカリキ村がなつかしい。空港で、うどんを食べた。やっぱり日本の味が僕にはいいと思った。鹿児島空港で、解団式を終え、この事業は終わった。

皆様ありがとうございました。

“Terima kasih”

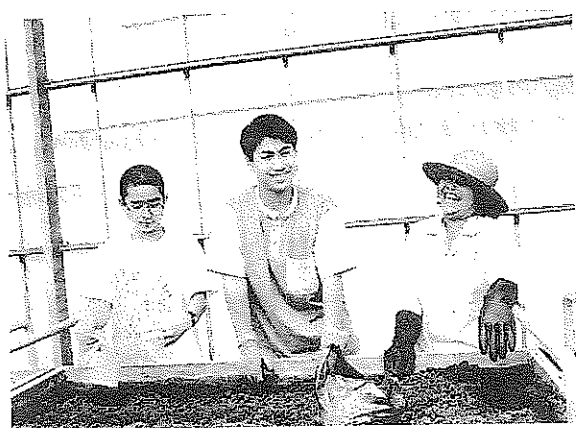


## 訪問手記

# 1人の「地球人」として

貴島 祐

(志學館中等部3年)



インドネシアでの青少年海外協力体験事業に参加して、良かった事はたくさんの人と交流でき、友達になれたことと、現地の青年海外協力隊員の話の聞いたり、活動を見たりできたことだったと思う。バンドンの点字印刷センターで活動している後藤隊員の言葉で強く印象に残っている言葉がある。“夢は追っかけてばかりではいけない。努力をして、その先の事を考えることが必要だ”。僕は今まで自分の考えのどこかに、努力なしに夢を叶えればいいという甘い考えがあったと思う。しかし、それを聞いて、僕は目が覚めたような気がした。そのセンターでは、170万人いるといわれる視覚障害者の為に点字本を作ったり、本などを朗読して吹きこんだカセットを作ったりしていた。その活動はまだ市民権を得るには、大変な活動だと思った。

WYATA GUNA 視覚障害者リハビリテーションセンターでは、宇野隊員の活動を見学したが、光を失った人達の生きる努力というものが感じられ、その手助けをしているのが、宇野隊員なのだなあと思った。ここでアイマスクをつけた歩行訓練や、箒づくりに挑戦したが、それは普段目の見える僕達には難しいことだった。僕達は、実際には目が見えるからいいが、本当に目の見えない人は実際問題として、このような事をしなければならないのだとすると、とても大変なことだなと思った。宇野隊員から、インドネシアでは視覚障害者が横断歩道を渡ろうとしたら、必ず誰かが助けにきてくれるが、日本では「かわいそうに」と思うだけで、誰も手助けしようしないということを聞いた時、日本は先進国と呼ばれるようになったが、日本人の心はまだまだ発展途上なのだなと思った。テレビでの手話放送をはじめ、このような施設があったということは、僕の最初の“インドネシアは社会福祉は遅れているだろうな”という予想からいうとかなり意外だった。又、チョコレ牧場では、牛舎の清掃に挑戦した。ここでは獣医として派遣されている小須田隊員の活動を聞いた。僕には、牛

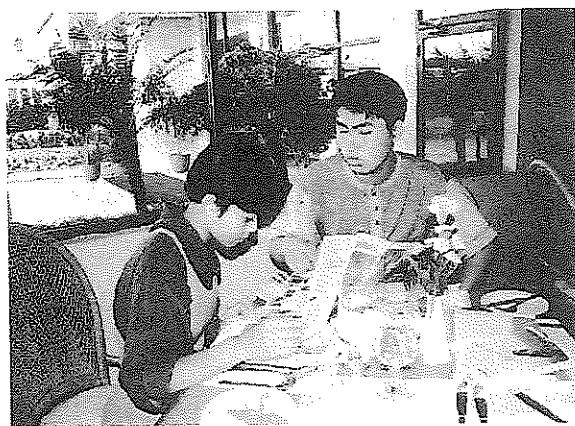


への mandi はなれないことだったので、最初はなかなかうまくいかなかったが、最後の方になると、少しはましにできるようになった。小須田隊員とは、隊員との懇談会で話す機会がありたくさんの事を教わった。国際協力の中で現地の人と一緒に働いて色々あるが、インドネシアの人は優しいということや、理想ばかり掲げず自分の人生は自分で決めた方がいいという事などたくさん話を聞いた。そしてこれからの僕の生活の中で一番大切な事を教えてもらった。他にパンガレンガンの種子馬鈴薯を育てているところで馬鈴薯を収穫した。今回は不作だったらしいが、それでもたくさんの収穫があって、作業が大変だった。今回、たくさんの青年海外協力隊の活動現場を見たが、これだけたくさんの種類の活動があることに驚いた。バンドンを中心に活動している青年海外協力隊員を通して感じたことは、どの隊員も一つの使命を全うして、一つの事に一生懸命に力をそそいで羨ましいと思う一方、僕達には想像もつかないほど大変な活動をしているのに、決して投げ槍にならずにいることは、凄いで素晴らしい方々にばかり会えたなぁと思った。僕達は5日間バンドン近郊のパシールカリキ村にホームステイした。最初の日には雰囲気圧倒され何も話すことができなく、その場になじめなかったが、翌日から積極的に話しかけてなじめるように努力した。国際交流というのは、日本人同士の以心伝心は通用しないので、積極的に話しかけて、相手の言いたい事を分かろうとする事が大切だということを知った。僕は幸

い、ホームステイ先で英語が少し通じたので、コミュニケーションがとりやすかった。そしてついには、相手の言っている事が分からなくても言いたい事が分かるようになった。それだけでなんだか心が通い合っているのかなという気がして嬉しかった。パシールカリキ村の標高は1000m。赤道直下のインドネシアに位置するにもかかわらず、朝は寒い。まさか、インドネシアで“寒い”という言葉を使うことになることは、夢にも思わなかった。この状態で、mandi（水浴び）をするということは、冬に冷水をかぶることと同じなのでとても厳しい日課だったが、終わった後がさっぱりして温まったので多少救われた。僕は毎朝4時45分に必ず起きていた。そのわけは、イスラム教のコーランが流れる時間だからである。このコーランはとてつもなく大きい音なので、いやでも起きなければならない。最初の日、びっくりして起きたというぐらいで、コーランが終わる頃には目が覚めていた。しかし、これがコーランかと思うと、歌みたいなものだとは思っていなかった。驚いた。イスラム教徒のホストファミリーにとって聖なるコーランなので、“うるさいですね”とは失礼でいえないが、正直行ってとても参った。起きてみると、大人も子供もみんな4時頃には起きていて、平均睡眠時間は5時間といたところだった。ホストファミリーの中に1人妊婦がいた。僕はホストファミリーに名前をつけてくれと言われ、男の子だった時と、女の子だった時の名前をそれぞれ考え、彼らに告げた。その後どうなったかは

分からないが、その時ホストファミリーが喜んでくれたのは、とても嬉しかった。僕はインドネシアに滞在期間中、小児医療と子供達の生活について調べてみた。インドネシアでの子供達の健康に対する意識というのは、僕のホストファミリーを例にとると、弟達が病気をしても自然にほっておくか、寝かせて熱を冷ますというぐらいで、どうしてもという時に、7kmも先にある病院に行くということだった。しかし、もし貧しい家だったら、そういうわけにいかない。結果、小児死亡率が高くなるのだ。又、視覚障害者の子供が多い理由は、先天性のものではなく、母親が妊娠中に貧血状態だったり、栄養不足であった事が原因の大半を占めるということも知った。今、日本からはしかやポリオ（小児マヒ）のワクチンを作る為に、インドネシアに派遣されている方々がいて、話を聞くと、一刻も早くワクチンが普及するようにと全力を尽くしているということだった。僕の予想以上に、インドネシアの小児医療の現場は厳しいということを知った。僕はこの体験を通して将来医師になれば、どういう医師になればいいのかを考えさせられた気がする。ホストファミリーには、9才、7才、2才の3人の弟がいた。最初、弟達は恥ずかしがって、大人の後ろに隠れたり、泣いたりしていたが、積極的に話しかけたり笑って見せたりすると、じきに、仲良くなれた。9才の弟はおとなしくて、写真を撮る時も恥ずかしがったりしていたが、僕が研修から帰ってきた時は、出迎えにきてくれたり、子供心に気を使ってくれ、実際に

弟がいない僕としては、本当の弟のような親近感が持てた。7才と2才の弟は、幼くてかわいかった。やはり最初は人見知りをしたが、2日ぐらいたつとなれて、なついてくれるという感じだった。9才と7才の弟はSD（小学校）に通っていた。父親はSDの先生をしていて、話によると、もし小学1年生が100人入学したら、そのうち中学1年生に進学するのは20人、高校1年生にまでなれるのは4人と聞いて、インドネシアの教育事情は厳しいなと思った。しかし、パシールカリキ村には、SMP（中学校）やSMA（高校）の学生が多く、インドネシアの中でも教育に力を入れているところだなあと思った。



僕は弟達の他に村の同級生やバンドンの高校生と友達になった。そしてもう一人、僕達がバンドンで色々な所に行く時、チャーターバスで働いていた1人の少年と友達になった。彼は僕と同年齢だったが、身長差がかなりあって、最初は「エッ」と思ったほどだった。僕は働いている彼を見た時、厳しい現実だなと思った。他にも僕はジャカルタの道路で沢山の子供が屯しているのを見た。なんと、その子供達は、そこでアルバイトをしているのだ。ジャカル

夕では朝の6時30分から10時まで車は3人以上が乗っていないと道路を走ることができない。そこで、数合わせの為に、ここの子供達を乗せて、数を揃え、終わったらRp 500～Rp 1,500ぐらいのお金を渡すのだそうである。その収入は、インドネシア人の最低賃金より高く、僕はこれを知った時、感心する一方、このような事をしてまでお金を稼ごうとする子供達の現状に厳しさを感じた。バスで働いていた少年は、最初は笑いもしなかったが、最後の方になるとむこうから笑って話かけてくれたりして、やはり積極的にコミュニケーションをとって良かったなと思った。僕がこれらの友達や弟達を見てきて一番痛烈に印象に残っているのは、自分を含めた日本の子供達と違って目が輝いているということだった。小学生はまだいいが、日本人の中・高校生になると受験勉強や不自由のない生活によってできた甘え等で目が死んでいるような感じを受ける。でもインドネシアの子供達は違った。たしかに、その日の生活も苦しくて、中には学校に行きたいのに経済的理由で中途退学して働かなければならない子供達もいる。それは厳しい現実である。しかし、彼らは生きていくために、その日を精一杯生きる努力をしていた。少なくとも何となく生きているという日本の子供達より、彼らは今を精一杯生きているのである。日本が先進国になるまでに遂げた発展は素晴らしい。でも、その過程の中のどこかで、失われてしまった飾らない心というものはインドネシアの子供達にはあった。僕はインドネシアの友達や弟達に、日

本での机の上の勉強だけでは決して分かりようのない何かを教えてもらったような気がする。あるインドネシアの方が日本人には親近感があって勤勉という印象があるといっていた。それでは日本人にとってインドネシア人は近い存在なのだろうか。多分近くはないだろう。日本人は経済的技術面では勝っていても、人間としての在り方で明らかに負けているからだ。今の日本人は積極的に偏見なく、国際交流をしようとする人はまだ少ない。僕もインドネシアに来る前はそうだった。それでは駄目なのだ。インドネシア人もアメリカやヨーロッパ人のように、同じ地球人なのである。僕は同じ地球人であるという最も重要な意識を欠いていた。

世界の人が手を取りあうというのは、先進国だけでなく、発展途上国の人達もみんな仲間であるという意識を取り入れることだ。それが今の日本人には忘れられがちなのである。僕は1人の地球人として同じ仲間を近い存在にしたい。インドネシアでの7日間は自分にとってこれからの生き方を教えてもらった良い経験だった。沢山の友達やホストファミリーに“See you again!”と言り返した。いつになるかは分からないが近い将来僕は人間的にもっと成長して、1人の地球人として、また1人の日本人として恥ずかしくない人間になったら再びインドネシアの土を踏みみたいと思う。

# 教育の大切さ

内藤 真帆

(甲南高等学校3年)

私は、インドネシアに行く以前から、いろいろな資料を読んだり、写真を見たりすることである程度、インドネシアに関する知識を身につけたつもりでした。しかし、

“百聞は一見に如かず”，まさにこの言葉通りでした。実際に私がインドネシアに行って、人々の生活、町の様子、青年海外協力隊員として活動されている人々に接して、初めてインドネシアを少々ながら理解することができたように思います。

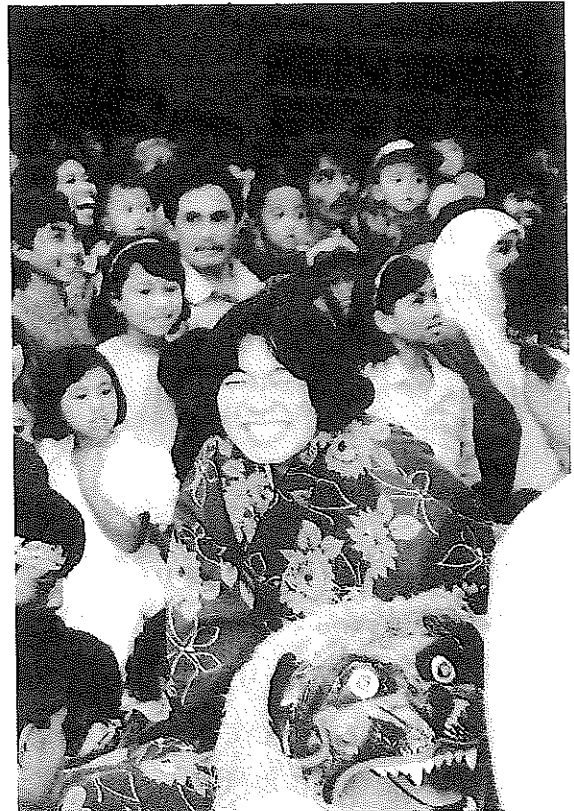
今回、私は学校教育という視点からインドネシアを述べてみようと思います。

ジャカルタでもバンドンでも、子供達が実によく働いていました。水や新聞を売り歩く子供達の姿がいたる所で見受けられました。インドネシア政府は、今年から義務教育をこれまでの6年間から9年間へと延ばしたそうです。インドネシアでは午前の部、午後の部と二部授業が行われています。それゆえに子供達が日中働くことができますのですが、この様なことは、日本では決して見られない光景です。しかし何とんでも驚いたのは、小学校の中途退学者の多さでした。専門家の人に尋ねると、年平均20パーセントから30パーセントの割合で中途退学する児童がいるとのことでした。勉強についていけずに登校拒否してしまったり、自分が学校に行きたくても家が貧しいために行けないなどというのが主な

理由のようでした。私達が移動する時に乗ったバスの運転手の助手をしている子供に、「何歳なの？」と尋ねると、「15歳」という答えが返ってきました。15歳というと中学三年生で日本ではまだ義務教育の段階です。しかし彼はすでに運転手の父親の片腕として一日中働いているのです。

健常者でさえも学校に通っていなかったり、中途退学するのですから、盲目の人はなおさらでした。4日目に、青年海外協力隊員が活動しているバンドンのウヤタグナ視覚障害者リハビリテーションセンターと「イ」点字印刷センターを訪問しました。

ウヤタグナでは、盲人が社会で自立して



いくために職業訓練が行われていました。ここは、全寮制で全て国の援助でなされているということでしたが、入所者は250人です。これはインドネシアの盲人のごくごくわずかな人々です。インドネシアでは人口の0.9パーセントが盲人なのだそうです。数にすると170万人。日本の40万人に比べてはるかに多いのです。なぜこんなにも盲人が多いかというと、妊娠中の母親の栄養不足や貧血によるものだそうです。彼らは生まれてからほとんど外に出ることもなく、家に閉じ込められ放置された状態です。そして、この施設に入って初めて30歳で学ぶこともあるという話には信じられない思いがしました。日本ではどのような人でも教育を受ける権利があるし、9年間は義務教育が課せられています。

インドネシアでこれだけ盲目の人が多なのは、貧困だけが原因ではないような気がします。もっと人々に栄養に関する正しい知識があれば、未然に防ぐことのできた障害だと思います。改めて教育の大切さを痛感しました。

「イ」点字印刷センターでは、何より隊員の生活、考え、活動に感銘を受けました。隊員の後藤さんは、センターの隣に住み、現地のスタッフの人々と同じ生活をしています。現地スタッフの人々と一緒に働いていると、“どうせ日本人は金持ちなんだから”“お金を持っているんだからお前がやればいいじゃないか”といった雰囲気になるので、それではいけないと思い、現地の人々と同じ生活をして完全に現地に溶け込み、まず信頼関係を築くようにしたと

いうことでした。さらに、信頼関係が築けたところで、点字を印刷する機械も録音する時の防音設備もないので、インドネシアのJICA本部に足を運び、資金不足を訴えたり、日本の機械会社に機械を売ってくれるように要請したり、自分で工夫したりと自らが行動を起こし、また自費を投じて運営している部分もある様子でした。後藤さんのお話を伺って、私は協力隊員として派遣されるということは、自分の専門の指導だけをやりさえすればよいというのではなく、現地の人々と生活を共にして、互いに理解を深め合い、尊重し合うことが何より大切なのだと思い直しました。互いの信頼関係の上に初めて目的が達せられ、効果が上がるのだと思いました。また任期を終えて隊員が去ったあとも、かつての信頼関係をよりどころにしてその仕事を現地の人々が継続してくれるのだと思いました。

滞在5日目、隊員との最後の懇談会がありました。“進学率が高くなればなるほど授業についていけずに中途退学する児童は今よりもっと増えていくだろう。でもそんな子らが職業訓練所ではいきいきとしているのを見る。皆がみんな同じ教育を受ける必要はないんじゃないかな”という隊員の方の発言があり、一瞬私は戸惑いました。みんなが義務教育を受けるべきだというのは、日本人の発想であって、インドネシアでは通用しない考え方なのだろうかという疑問を抱きました。確かにインドネシアの進学率が中学60パーセント、高校15パーセントという現状では、義務教育の施行でさえも難しいのかもしれない。

平和で豊かな国を築くためには、一握りの有能な人々よりも国民一人一人の高い意識が必要だと思います。そのためには長い目でみて、学校教育は大切に重要なことではないかという気がします。

バンドンやジャカルタで見かけた水を売る少年達が十分な教育を受けて、インドネシアの将来を担って立つ日が近く来ることを願う時、果たして私に何かお手伝いできるのだろうか、という新たな課題を抱えて帰途につきました。



# 「ものさし」

松元 隆浩

(市来農芸高等学校3年)



現在、日本は盛んにアジア以外の国々、特にアメリカとの経済協力を力を入れています。しかし、これからは同じアジアに住む国々や人々との交流や協力をもっと盛んにして、お互いの将来を築いていく事が必要だと思います。そこで、私はインドネシアの農業事情について調べ、今後日本はアジアの一員としてどのような交流や協力をしていけばよいのか考えてみました。

まずインドネシアが、日本と同じ「農業問題」を抱えているかどうか調べました。農業従事者のお嫁さんが不足する心配はないようです。若者の農業に対する見識は、日本のように3Kのような偏見はとくに持っていないようですが、若者の農業離れと、都市部への集中は少しずつあるようです。農業による環境問題については、山林を切り開いての農業が進む中、保水力を失った山から河川への土壌流出が心配されています。その為、ジャワ島にある「ブンガンワン・ソロ」という川、昔この川は歌

の題材になるぐらい、とてもきれいな川だったそうですが、今はもう周りからの異常な土壌流出によって汚染されているそうです。これは、ブンガンワン・ソロだけではなく、このジャワ島一帯の川が土壌流出による「泥川」で問題になっているそうです。

今後農業を運営していくうえで早急に解決しなければいけない問題「農業と環境のつり合い」については日本と全く同じ問題を抱えていました。

次に、農家の形態について調べました。こちらの農家の形態は4つに別れていました。1つめは、「大農園」という地主は全く土に触らないで、人を雇って収入を得る農家。2つめは、自分の畑を所有・管理していて、それだけで収入が十分の農家。

(この形態は少ない)。3つめは、自分の畑は持っているがそれだけでは収入が足りないで、大農園に働きに行く農家(この形態が多い)。4つめは、自分の畑を持っていないので大農園に働きに行く農家です。このように農家の形態一つとっても、貧富の差がはっきりしている事には驚きました。

ところが、外側からだけ見ていると「自分の畑を持たない農家があったりして大変そうだ。」と思われがちの農家も、それぞれ自分に合ったうまい経営をしている事が

分かりました。例えば、自分の畑を持たない農家は土地を購入して経営するより、大農園に働きに行く方が早く収入が得られるし、大農園の経営者は、そのような人々を雇った方が、高い機械を購入するより安く済みます。

こうして見てみると、お互いがお互いの長所・短所を活用して、うまくつり合った経営をしている事が分かります。だから、外見だけ見ると大農園の経営者は機械を使わない、全て人の力による経営をしているので能率が悪そうですが、もし、大農園が機械を導入すると、少人数による経営が可能になるので、雇われている人々のほとんどが解雇されてしまいます。すると、今まで大農園に働きに行く事によって収入を得ていた人々の生活を困らせることになるのです。

国際協力・国際支援というと、すぐに人力に変わる機械を導入すればよい、と思われがちですが、単に能率のよいものを使ったからといって、その国の生活がよくなるわけではなく、逆に、その国の生活を困らせる事になりかねないのです。

今回の研修で、私達は多くの協力隊員と話をする機会がありました。そこで言われた事は「日本の“ものさし”と、こちらの“ものさし”は違う」という事でした。この“ものさし”は、国の政治や経済を表わしているのではなく、その国の文化や歴史等を表わしているのだと思います。(この“ものさし”は特にこれといった定義がないので、文化や歴史以外にも色々な深い意味を持っていると思います)。そこで私は

考えました。今後日本がアジアの一員として、海外へ支援・協力していくなかで一番大事な事は「その国の“ものさし”に合った協力」だと思います。

この“ものさし”将来自分達が海外で活動する際、すごく重要になりそうです。





# 人々の「あたたかさ」 にふれて

今村 沙織

(北指宿中学校3年)



「インドネシアなんて、何しに行くの？」

ある私の友人に、インドネシアに行くと伝えた時、返ってきた言葉であった。インドネシアは開発途上国だから何もないと、偏見のこもった言葉であった。事実、私もインドネシアに行くまではこのような偏見を少なからず持っていた。しかし、それはインドネシアで過ごした7日間で次第に薄れていった。

ホームステイの1日目、歓迎式が終わったあとホストファミリーといっしょに家へ向かった。家は今まで想像していた物とは違い、けっこう立派だった。屋根には瓦があり、日本に近いものを感じた。家に上がると台とソファがあり、すぐに「ミネン」(飲んで)と言ってジャワティとお菓子をすすめてくれた。そのあと家族みんなが集まって来た。私はインドネシア語はカタコトしかしゃべれないので、家族の写真や日本からのおみやげを見せて説明した。

みんな興味深そうに見ていた。その間にもお菓子をすすめてくれた。とても良い人たちだなと思ったが、同時に「言葉も通じない、生活習慣も違うこの家でちゃんとやっていけるだろうか」と不安もこの時になって生じてきた。

私がホームステイをした家のことについて少し話そうと思う。まず驚いたのが壁が竹の様なもので編んであり、その上から白い塗料が塗ってあることだ。壁に寄りかかった時に壁がいとも簡単に揺れるものだからびっくりしてしまった。部屋は四つ、私が泊まった部屋、台所のある部屋、テレビがある、みんなでくつろぐ部屋と物置のような部屋だ。トイレは家の外の池の上に、ちいさな竹で作った部屋があった。お風呂はインドネシア語で「マンディ」と言い、サロンという布を巻き付けて行う水浴びだった。マンディをするときはとても寒かった。私達がホームステイしたパシールカリキ村は標高が高く、割合すずしい気候だったからだ。マンディは慣れることができたがトイレは慣れることができなかった。

マンディのことでちょっとしたエピソードがある。私がある時マンディをしていると、隣の家の子がひょっこりと現れた。私はあわてて「ここを使うの」と身振り手振りですすと、「うん、うん」とうなずいたので急いで着替えをして出ていったことが

あった。後で聞けば、トイレやマンディをするところは隣どおし共同で使っているらしい。日本ではまずないことだ。このパシールカリキ村は、地域全体がまるで家族のように仲が良かったことが強く印象に残った。他人の家でもけっこう遠慮なく、ずけずけと上がりこんだりしていた。ここには今の日本人が忘れてしまった何か、あたたかいものがあったと思う。

ホームステイ2日目の朝、はじめてインドネシアの家庭料理を食べた。メニューは白米、野菜スープ、魚のフライ、入り豆、えびせんみみたいなものにジャワティ。それを皿にとって食べる。野菜スープをパサパサした御飯にかけてスプーンで食べた。まあまあおいしかった。「エナン」（おいしい）という「マカン、マカン」（食べなさい、食べなさい）と言ってすすめてくれた。

その日の活動はパンガレンガン種子馬鈴薯研究所見学で、早く活動が終わったので市場に行った。そこはインドネシア語で「パサール」と言うそうだ。値段交渉ができてとても安かった。ここでは衣類、食べ物などなんでもそろろうといった感じだった。

パシールカリキ村の家に帰ると、卓球台で子供たちが卓球をしていた。ここでの娯楽は卓球とテレビらしい。

家の中に入るとまた「ミヌン」と言ってジャワティとお菓子をすすめてくれた。お菓子はバナナのでんぷら、せんべいのようなもの、クッキーのようなもので、どれも日本のお菓子のように着色料などの添加物

はなく、自然な感じがしておいしかった。

8月5日、青年海外協力隊員との懇談会があった。協力隊の人はみんなしっかりした人ばかりだった。自分の仕事にやりがいと誇りをもっているようだった。前日、点字印刷センターを見学したときの後藤隊員の話で「仕事上のことだけでなく、現地の人と同じ生活をして、人間的にも交流を深めないと仕事はスムーズにいかない。」という言葉が印象的だった。懇談会でいろいろ質問できたので、とても自分のためになった。私も将来はこの人たちのようになりたいと強く思うようになった。

この日の夜に、私はホストファミリーのみなさんにたくさん日本語を教えてあげた。教えた日本語のなかでは「ねこ」が覚えやすかったらしく、彼らはその時ばかりでなく次の日になっても「ねこ、ねこ」と言っていた。

パシールカリキ村の朝夕はとても冷え込む。村の人は寒くなると上着やサロンを着ていた。「インドネシアは暑い国」と思い込んでいた私は、この涼しい気候を肌で感じたとき「インドネシアって涼しかったんだ。」と驚いてしまった。本当にインドネシアとは思えないほどだ。人々の服装は日本の秋あたりと同じ服装だった。街でよく見かけたのがイスラム教の女の人が着ている、日本で言う“あまさん”のような服装だ。肌があまり見えてはいけならしく、上から下まですっぽり隠れる感じの服だったので暑そうだった。

インドネシアの家庭にもホームステイして、家庭生活、習慣などを見ることができ

た。インドネシアは何もない国ではない。建物も立派な物がある。生活水準も低いというよりはむだのない生活だった。それに人と人とのきずなが深く、日本人が見習わなくてはいけない部分も沢山あった。赤の他人、しかも外国人である私達をあたたかくもてなしてくださり、別れる時には最初もっていた不安は全く消え、本当の家族のように接することができたのも、村のみなさんのおかげだったと思う。このあたたかさは、インドネシアが日本のように発展した

のちにも今と変わらずにいてほしいと思う。

私は将来青年海外協力隊に参加して、開発途上国の人々といっしょに働きたいと思う。この事業に参加して、言葉や文化の違いなんて恐れずドーンとぶつかっていくことが大切だということがわかった。

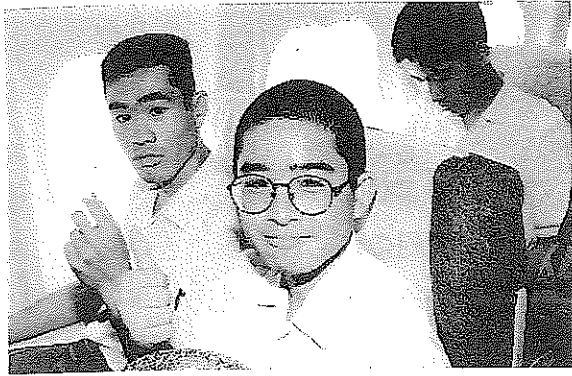
別れる前日、ホストマザーが「またきてね」と言ってくれた。その言葉どおりもう一度パシールカリキ村に行こうと思う。その時は今よりもっと言葉を学んで日常会話ができるぐらいになっておくつもりだ。



# パシールカリキ村での生活

河野 友亮

(出水中学校2年)



僕は海外協力という事に、魅力を感じていました。しかし、それは教科書の中でした。感じられないことだったので、いつか僕はその夢を実現させようと思っていました。

この海外協力体験事業では、協力体験だけでなく、さまざまな人々とのふれあいもあって、僕はこの一週間でかけがえのない事を学びました。

飛行機を何回も乗り換えて、ジャワ島に着いた時は、熱帯のイメージをくつがえす様に、はだ寒く、あとからインドネシアは、今、乾期だということに気付き、南半球に来た事が実感でき、うれしかったです。

次の日に、外の風景を見たら、家、家、家と、密集した家だらけでした。それを見て、また「ここはインドネシアか。」と、実感しました。

インドネシアは、農業などが主でしたが、今では、首都ジャカルタやバンドン、バリ島など、人口の多くなっている所で、日本の国際援助などもおこなわれているた

め、現地では、少しずつ発展してきているようでした。

僕達は、ホームステイ先のパシールカリキ村で、お世話になりました。パシールカリキ村の人々は、とても早起きで、午前4時にはもうホストマザーは起きていました。そのわけは、村の人々がイスラム教を信仰しているため、朝になるとコーランという音楽か言葉かわからないような、音を聞きながら、お祈りをしていたようでした。

僕達はパンガレンガンにある、種子馬鈴薯組織培養実験室で、小さなたねイモを収穫する体験学習をしました。あとから聞いてみると、

「1日中この仕事をして、日本円で約90円ぐらいしか、日給をもらうことができない。」と知りました。それから、ウヤタグナ視覚障害者リハビリテーションセンターの宇野隊員は、

「国家公務員でも、その仕事だけでは、食べていけない。」と、言うのです。インドネシアという国は、なぜ生活に、違いがあるのでしょうか。パシールカリキ村の人々は、いろいろな職業の人がいました。警官や先生、半農半漁の人や畜産をしている人など、さまざまでした。そんなにも、さまざまな人々がいる村なのに、隣や近所のつきあいが、まるで家族の様でした。別の意

味で言えば、それが村の人々の生活の知恵となっているのではなかったでしょうか。まるで50・60年も昔の日本の様に。

パシールカリキ村で僕達は、また、新しい発見をしました。村にはお風呂はなく、かわりに、マンディという水浴びをしました。このマンディは、真冬の冷水をかぶるぐらい冷たい水なので、とても寒かったです。

「これを、酷暑の続いている今年の日本でやったら涼しくて、いいだろうな」と、マンディをしていた時に、考えました。

いろいろな事が頭の中を通り抜けて、なにか、とても複雑な感情が生まれました。僕にできることはないだろうか。僕は、この時感じました。

「ああ、これが協力するという、まぎれもなく人間にある心なのか。」そう感じた時から、村の人々と僕は、親しみを持てるようになりました。

僕は誓いました。今度、この国を訪れる時は、必ず国のためになることを行い、海外協力を務めるようにするのだと。



# 私の貴重な体験

松村 むつみ

(国立南九州中央病院付属鹿児島看護学校1年)



私は今回このプログラムに参加し、今まで体験したことのない様々な貴重な体験をすることができました。私にとって、海外に行くことでさえ貴重な体験なのに、さらに普通では体験できないことまで体験でき、このプログラムに参加する前に想像していたもの以上にすばらしい体験をすることができました。

初めての海外ということで、文化の違いを大きく感じました。一番強く印象に残ったのは生活習慣の違いでした。食事をする時はスプーンやフォークを使わずに右手で食べるということをインドネシアに行く前に教わっていたので、そのつもりでいたのに、私のホストファミリーは、スプーンとフォークを準備してくれました。食事は私の分だけ食卓においてあって、家族は別室で食事をしていました。それは、お客様としての扱いだと後で聞きましたが、一度も家族と一緒に食事ができなかったことが残念でした。

トイレの用式も違い、紙は使用せずに、

水と手で洗うということでしたが、どうしてもできなくて、紙を用いました。

生活習慣で一番強く印象に残ったのは、水浴び（マンディ）でした。お風呂につかるという習慣はなく、サロンという布を体に巻いて、お湯ではなく水を浴びるというもので、1日、朝・昼・夜の3～4回するということでした。私がマンディをするときはママがお湯を沸かしてくれましたが、それでも、パシールカリキ村は標高1000mの所にあり、毛布一枚では寒くて眠れないという涼しいというより朝夕は寒いところなので、お湯であっても水を吸ったサロンが風にあたって冷たくなり体にピッタリくっついたりして、とても寒く感じました。その上朝、歯がかみ合わない程寒いときにマンディーをすすめられ、寒いので断ろうと思いましたが、もうお湯が準備されていたので断るわけにもゆかず、マンディをしたときは、いくらお湯をかぶっても震えが止まりませんでした。でも、ホストファミリーの人達は私がマンディーした時間よりも前に、朝の冷たい水でマンディをしていました。毎日、冷水をかぶれば体も丈夫になるだろうと思い、一種の健康法でもあるのかしらと考えました。そして、村の人達が皆近所どうしというより村全体が親しいのに驚きました。夜、家に近所の人があたり前のように入ってきて、おしゃべ

りをしていたり、村の幼い子供をまとめてあずかって育てていたり、今の日本では全然考えられないようなことなので、とてもうらやましく感じました。

ホームステイしながら、いろいろな所を訪問しました。パンガレンガンの種子馬鈴薯の実験場、視覚障害者リハビリテーションセンター、点字印刷センター、チコレ牧場では、青年海外協力隊の隊員の方達がいきいきと活動されていました。隊員の方の話の聞くと、たいへんな仕事ながらも、現地のスタッフと力を合わせて楽しんで仕事をしているという印象を強く受けました。今回訪問した先々で活動している隊員の皆さんが口をそろえて言っていたことは、協力してやるという気持ちで接しても、現地の人は共に仕事をしようとしてくれない。現地の人と同じ生活をし、同じ立場で同じ気持ちになり、同じ目標に向かって行くのだということでした。その中でも、「協力

してやるのではなく、むしろ協力させてもらうんだ」という言葉が印象に残りました。イキイキとやりがいのある仕事を、現地スタッフと共におもう存分楽しみながらしている姿をみて、うらやましく感じました。今回は医療の現場を見ることはできなかったけれど、私も将来看護婦として、青年海外協力隊に参加してみたいと感じました。

今回のプログラムを通じて、たくさんの人に出会いました。そしていろいろなことを学びました。同じ立場に立ってみると、相手の気持ちが伝わってくるということを強く感じ、それが、国際協力の上で重要であるのだなと思いました。

村を離れる時には、村での生活が思いだされて、とても辛かったです。今度は青年海外協力隊の隊員として、インドネシアを訪ねたいと思いました。



# 「彼らといっしょに」

向江 智生

(加治木高等学校2年)

僕は自分の国、日本をもっとよく知るために、外国へ行きたかった。日本の生活や、日本人の価値観や考え方を外と比べてみたかったからだ。それによって、自分の視野を広く持ち、自分の人生に少しでも生かしたいと思った。

実際に、インドネシアへ行く機会を得、このことについて考える機会をも同時に持った。実にラッキーだったが、やはり不安はある。初めて訪れる外国だ。日本語など通じないし、生活様式も違うだろう。多少インドネシア語を勉強はしたが、所詮、付け焼き刃だ。ホームステイをして、どうやってコミュニケーションをとるか、そればかりを考えていた。

僕たちがホームステイしたパシールカリキ村は、人口約1200人程の農業の村だった。州都バンドンから小さなバスでゆられて約50分、村に着いた時はもう真っ暗だった。それなのに村人全員で迎えてくれた。かなり盛大な歓迎式で、皆、僕らに笑顔を見せてくれた。どの笑顔も本当に心からうれしそうで美しいと僕には感じられた。とても人なつっこい明るい人たちで、わずか小一時間程でたくさんの友人ができた。日本と違って知らない人にでも話しかけて、すぐ仲良くなってしまうのはすばらしいと思わずにはいられなかった。

僕が覚えたインドネシア語は「テリマカ

シー（ありがとう）」と、一日のあいさつ「パギ（朝）、シアン（昼）、ソレ（夕方）、マラン（夜）」そして「マアフ（ごめんなさい）」とわずかこれだけだった。歓迎式の後、ホストファミリーの家へ行った。その家のお父さんが僕の重いスーツケースを持ってくれたので「テリマカシー」と言うとか何か一言二言言って笑い返してくれた。もちろん意味は解らなかったが、だいたい解る。やはりコミュニケーションは心なのだ！ 自信が出てきた。

家では、おそらく誰かが使っていたひと部屋を与えられた。そして常にこの家のお母さんがコーヒーとお菓子をいらないかと





ジェスチャーで尋ねてくる。時々うっとおしく感じるくらい親切に世話をやいてくれる。食事も彼らは朝食はとらないのが通常なのに、僕のためだけに朝早起きして、ご飯をよそってくれる。そして「エナック（おいしい）？」と尋ねてくるのだ。まずいわけがないじゃないか。村の人は、すべて僕らにはこんな感じで誰もが声をかけてきて、笑顔を向けてくれる。かたことのインドネシア語で何か言い、それが通じるとまた喜んでくれるのだ。それを見ると、僕自身も当然ながらうれしくなるのだ。

村での生活で、とても苦勞したのは、左手とトイレだ。インドネシアはイスラム教徒が国民の約90パーセントを占めている。イスラム教では左手は不浄の手とされ、左手で握手したり、物を受け渡ししたりするのはタブーなのだ。うっかり左手を出してしまっ、あわてて右手を出すということはしょっちゅうだったし、ごはんをこぼしてしまったのを左手で拾って食べたという失敗もしてしまった。もう一つ、何故トイレが困るかという、トイレは水洗は水洗なのだが、手動の水洗、つまり左手で水を持ってきて汚物を処理する、いわゆるハンドウォッシュなのだ。これはすごく抵抗があって決心をつけてトイレに入ったことが今ではいい思い出の一つになっている。

別れの日には涙が出てしまった。お父さんやお母さん、お婆さんやお爺さんに至るまで、両手を重ねて頭を下げるというイスラム式のお別れをした後、お父さんに送られてバスのところまで行った。この時ばかり

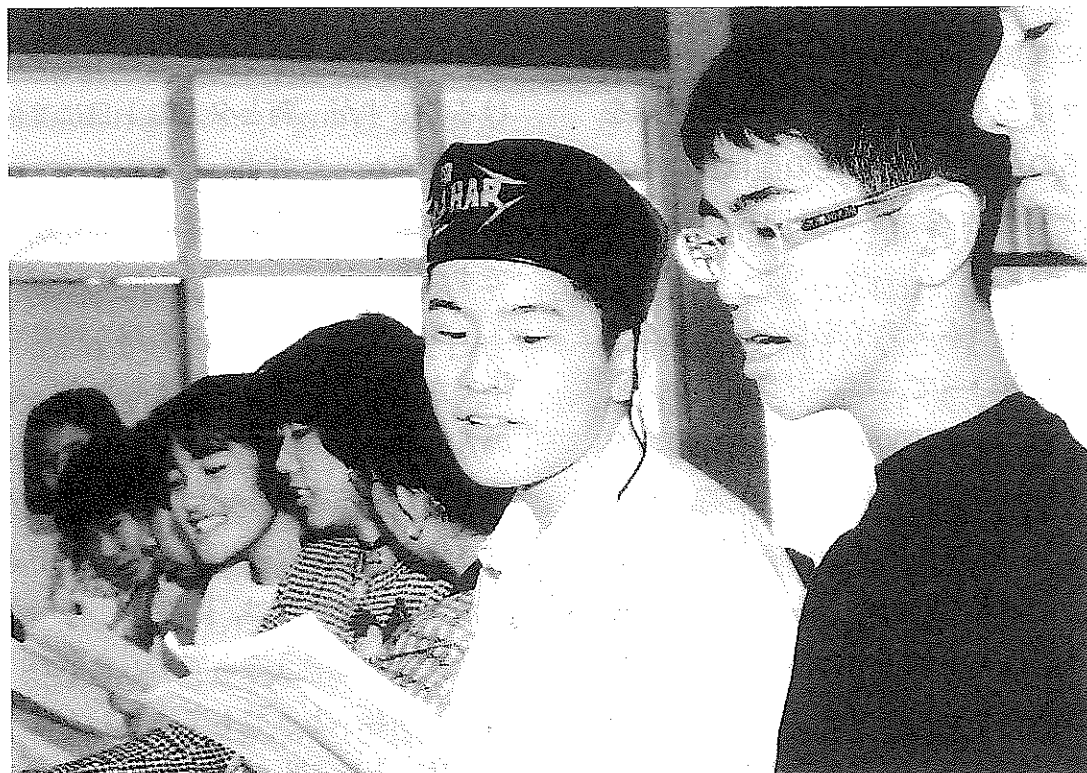
は笑顔の人は一人もいなくて僕は必死で涙をこらえた。インドネシア語で「また来るよ」と言えなかったのがすごく悔しかった。でも家族は僕の言いたいことを全て理解してくれたように見えた。最後の最後は涙声しか出なかったけれども、お父さんがたどたどしく「さようなら、またおいで」と日本語で言ってくれた。目頭がさらに熱くなるのをおさえきれず僕は父に抱かれて泣いた。

ところで、発展途上国と聞いて僕達日本人がイメージすることはどんなことだろう。貧しいとか、かわいそうな人が多いなどというような漠然としつつも同情を含んだものであろう。中には非科学的な人が多いなどと偏見を感じる人もいるかもしれない。また中には何とか援助してあげたいと考える人もいるに違いない。僕もその一人であった。ところが今は彼らの為にとは思わない。何故なら、その言葉の裏に、「私達は金持ちなのだ」と言わんばかりの傲慢さを感じるようになったからだ。自分の思想は正しいと信じ、謙虚さを装いつつ、平気な顔をしていたのだと思うとゾッとする。

今回、協力隊員と接して、まず国際交流とは、互いが互いの文化を理解し、尊重し合うということが大切なのだとわかった。それを忘れず、一方的に僕らの生活様式を途上国の人々に強いるのではなく、彼らのためにはどうするのが一番ベストかといっしょに考えることが大切なのだ。言いかえれば「彼らのために」ではなく「彼らといっしょに」なのだ。もちろん経済的な援

助も必要だが、それだけでは何も生まれ  
ない。

この体験を通して、国際協力についての  
自分なりの考え方ができたことをとても誇  
りに思う。このことを僕の人生に大きなプ  
ラスとして生かすことを誓い、努力してい  
きたい。



# 心のやさしさを感じて

倉岡 智恵子

(東谷山中中学校3年)



私の将来の夢は保健婦になってみんなの役にたちたい、ということです。今回の体験事業に参加するにあたって、インドネシアの人々はどんな物を食べ、どんな生活をしているのだろうか。衛生の面は良いのだろうかというさまざまな疑問がありました。

私たちがホームステイをした村はパシールカリキ村といって、バンドン市内から東へ35kmほどの標高1000mの山あいの農業を主体とする村でした。村に入った時、一番最初に感じた事は、肌寒いなあということでした。赤道近くの国だから、どこでも日本のように暑いと思っていたのに、朝方と夕方は特に冷えこみ、バンドンでは今、かぜが大流行していると耳にしました。

村で生活するのに一番こまったのはトイレとお風呂でした。

私のステイ先は一応、すき間をあけた竹で組んでありましたが、他の所では、便器があった所もあれば、家にトイレがなく、

近所の家と共有しているということでした。村の人達は本当にみんな親戚のように仲が良いので、ちょくちょく遊びに行ったり来たり、今の日本ではちょっと見られない光景かもしれないと思いました。

トイレとお風呂(水浴び)の場所是一緒でしたが、場所が分かれている所もあり、それぞれでした。

こちらでは、お風呂は行水のような水浴びをします。

サロンという布を体に巻き、水を桶でかけるのですが、朝と夕方の1日に2回しましたが寒かったです。

このような体験も、楽しい思い出の1つです。

インドネシアへ出発する前に研修などで手で食べる練習などをしましたが、私の家の人は、スプーンで食べていました。

食事をするとき、私は、いつも1人で食べさせられていたことが、とても不思議でした。聞いた話では、お客さんあつかいをされているということです。食事の内容は想像よりも、とっても辛いもしくは、とっても甘いというものばかりで、ごはんはパサパサとしていました。パサパサしているのは、水分が少ないためと、くさりにくくしているためだそうです。魚やチキン、野菜スープ、大豆をいって塩味をつけているもの、平たい卵焼き、それにエビせんがメ

ニューをかえず毎日出てきました。その中の魚は多分淡水魚だったような気がします。なぜなら、村で朝早く、つりをした時につれた魚にみえたのです。

しかも、そのつり場が村のプール、トイレと、マンディをする場所の下にたまっている水の中をぴちゃぴちゃと元気よく泳いでいた魚なのかもしれないと思った時は、ゾッとしました。こんな魚を食べて大丈夫なのかな？と思いましたが、とても美味しかったです。

果物は種類も豊富で、めずらしいものばかりだったし、何より、リンゴが市場で売られていたのにはおどろきでした。リンゴは日本でも長野、青森などの東北地方が産地として有名です。ふつう北の果物というイメージがありますので、鹿児島よりもさらに南のこの国にリンゴが売られていたのでびっくりしました。栽培しているのではなく、輸入しているのかもしれないという疑問が生まれましたが、南国の果物としてのイメージが強い、マンゴーやパパイヤ、バナナの側にあると、とてもアンバランスな感じに見えました。乾期の今でも、果物は美味しいのに、雨期ではどんなにだろうと、楽しみになりました。

村の朝は早く、朝の5時前からイスラムのコーランが村にひびきわたりました。初めて聞いた時はいったい何だろう？と思い、寒いので、毛布にくるまって考えました。その時には、ホストのイブが起きていて、マンディ？と聞いたのですが、「寒いのでいい」と伝えたいのがうまく伝わらず、お湯を用意してくれていました。言葉

は通じたり、通じなかったりの毎日で、相手は一生けん命に聞いてくれ、逆に日本語でいいながらジェスチャーをすると、インドネシア語で教えてくれます。相手も私にジェスチャーとインドネシア語で話してくれ、分からないなぁという表情をすると、あちらもこまったなぁという表情をしました。

私はたったの4日間で何だか表情が豊かになったなぁということと、一生けん命考えるようになったと思いました。

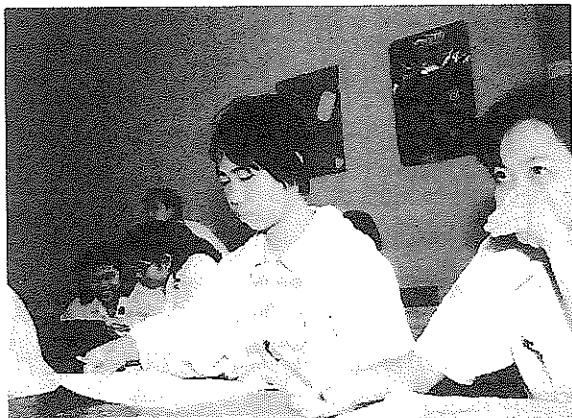
8月2日の夜、この村に着いた時はものすごい歓迎ぶりに驚き、又、一瞬のためらいがありました。ステイ先に入った時、家の中の人数が多く、イブとババ以外はだれがだれなのか分からず、首をかしげていました。村の人々は本当にやさしく、外出して帰ってくると、いつもコーヒーとおかしとバナナが出てきて、夜はいっしょにテレビを見ていました。毎日、毎日が充実した日々で、まだ帰りたくないと思いました。

現地を見て、聞いて、実行できたのはとてもうれしかったです。見ると聞くとではとても差がありました。協力隊員の方々の活動の中で一番印象に残ったのは、ウヤタグナ視覚障害者リハビリテーションセンターを訪問した時です。インドネシアには人口の約1%の人々が目が見えなかったり、身体に障害を持っていると聞いたことです。

生まれながらにして障害を持つ人々の中には、もちろん遺伝もありますが、妊娠中の女性の栄養が足りないためもあるということで、今、私たちのまわりでは、珍しい事だと思いました。

アイマスクをつけて、目が見えない人の気持ちにさせられ、つえをもって歩いた時、ほんの少しの段があったりすると、とてもこわく感じました。

宇野隊員の話では盲人が道路をわたるとき、近くにいる人がすぐに手をかして渡してくれるなどの話を聞いた時も、日本ではちょっと見るような気がしました。



私自身、だれかがやってくれるだろうと思っていたことが、だれかがする前に、自分がしなければならないということを学んだことと、また後藤隊員の話の中で印象に残った言葉は、「信用されなければならない」と言う言葉です。なぜ信用されなければならないのか。“お前たち日本人がすればいいじゃないか！”“俺たちには関係ないよ”と言われ、いっしょに住み、屋台を手伝ったりしたと聞きました。彼らといっしょに考え、そして学ぶことがあり、教えるんじゃないと言いました。

学校訪問をした時、学校の中にお祈りをする場所がありました。

高校まで進学する子は本当に少ないようです。高校の制服を見て、おやっ？と思った事は、女の子の中で数名ほど、顔を布でおおい、スカートも足がきれいにかくれる

程洋服を着て、他の人は半そでのシャツなのに、長そでのシャツを着ていたということで、となりにいた女の子に、理由をたずねると、「それはイスラム教徒だからよ」と答えました。学校までイスラム教がかかわってきていた事にびっくりしました。イスラム教がかなり強く信仰されている国だと感じました。

インドネシアという国にわずか1週間ではありましたが、滞在して、最初に思っていたイメージとはちがうなあと思いました。中進国で、電気やガスはない、もちろんテレビなんかもない。ところが、はだか電球が家の中をてらして、テレビもありました。父や母に聞いた所、今から40～50年ほど前の日本の一般家庭に似ていると言っていました。私には、村での生活が無理無駄の無い経済的な生活の様に思えました。

村で生活してみて、一番印象深かったのは、今の日本人には少し欠けているかもしれないやさしさではないだろうか。村人と接してみて、心が豊かだと思いました。それに、先入観からもっていたものがなくなりました。私はかつてに貧しい人々ときめつけていましたが、そうではありませんでした。自分達も文化人ではない、世界各国、自分の目だけで見ているわけではないので、かつてに決めてはいけないと思う様になりました。

これからは、私のように、先入観であやまった判断をする人が大ぜいいるかもしれないので、村で感じた人間本来の心のやさしさと感じる心と、心の豊かさを心に刻んで、私の未来の夢をおいかけていきたいです。

# 僕が得たもの

安栖 尚幸

(鹿児島第一高等学校2年)

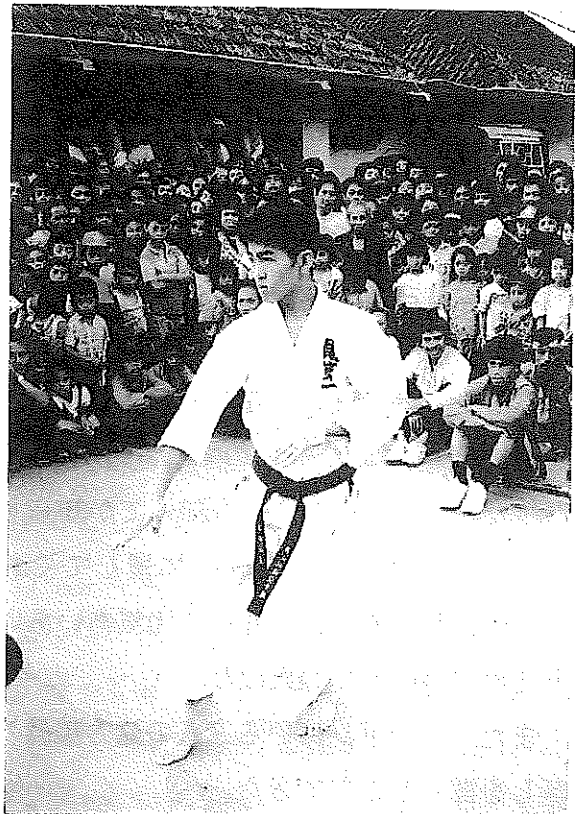
僕は、今回この体験事業に参加する際に、「インドネシアの家庭生活」と題して、インドネシアの人々の生活のリズム、一日のスケジュールを自主課題としてまとめるつもりだった。しかし、実際現地に行っているいろいろと見聞きするうちに、この課題があまりにも浅はかで、インドネシアという国の特徴を考えないものであることに気付いた。それは「インドネシアの人々は、朝何時ごろ起きて、何時に食事をすませて、何時ごろ学校や仕事が終わる…。」と、このように一筋縄ではいかないからだ。

JICAプロジェクトの一機関である「BBI」で、そこに働く現地の労働者は、朝9時と昼3時の一日に2回しか食事をしなくて、それ以外は、コーヒーやお菓子を少し口にするだけだということを知った。また、隊員達からジャカルタやバンドンのような都市では狭い部屋に何十人も住んでいて、その人々は昼も夜もなく時間があれば仕事をしている。そのため、いつ食事をするとか、夜に眠るとか決まっていない。また国家公務員まで仕事の後、夜に焼き飯や焼そばなどの屋台を引いているということを知った。

一方、僕等がホームステイした村のほとんどの人々は、自給自足の生活をしている。朝は早いうちに、昼は陽の傾きかけた

夕方ごろ涼しい時間を利用して農作業をしている。最近ようやく、たばこの葉など、商品作物を出荷してほんの少しの現金収入を得ているようだ。もちろん、学校の先生などある程度の収入があって、安定した生活を送っている人々もいる。子供を中学、高校と進学させることができるし、車を持つこともできる。

その他に、イリアンジャヤには、未だジャングルで原始的な生活をしている人々がいるし、都市の高級住宅街には、衛星放送のアンテナをつけた豪邸に住み、女中を何人も雇い、大きな車を何台ももっている人々もいる。この後者の方は、インドネシ



アの人口の数パーセントにしかない一部の人々だ。

このように、この国の貧富の差が、彼らの生活に大きく影響している。

インドネシアは、1万5千の島々からなり、250の民族から成り立っている多民族国家である。ということは、その数だけ独特の文化、習慣、があり、その文化や習慣の数だけ、物の価値観のちがいや、生活のちがいがあると考えるべきではないだろう。

この二つのことを考えると、彼らの生活を一概にどうこう言うことはできない。もし言うとしたら、それは、インドネシアという国の問題や、文化、習慣を無視する意見であり、大げさかもしれないが、インドネシアに対する侮辱にもなりうるだろう。

僕はこの一週間のうち様々な体験をした。とりわけ印象深いことは、青年海外協力隊やJICAの専門家の方々と直に接することができたということだ。

BB Iという種子馬鈴薯をJICAのプロジェクトとして栽培している研究所を訪問し、できた種子馬鈴薯の収穫の手伝いをした。僕はそれまでこのような二国間のプロジェクトは、日本人のスタッフと現地労働者の間柄がよくないのでは…?と心配だったが、僕の心配を知ってか知らずか、彼らは僕の心配を大いに覆してくれた。研究所の彼らはお互いに和気あいあいと仕事にはげんでいたのだ。

また、バンドンにいる三人の協力隊員の話しを聞くことができた。

視覚障害者リハビリテーションセンターで指圧師の養成をしている宇野隊員は、今、自分の任期がきたときに仕事を引き継いでくれる教員候補生に技術を教えているということだった。今まで指圧というものがインドネシアにはなく、全く初めての試みだそうだ。それをたった一人で一国に伝えている宇野隊員を尊敬せずにはいられない。

また、後藤隊員は「I」点字印刷センターで視覚障害者向けに、カセットテープに番組を編集する仕事をしている。彼は僕等に現地スタッフとの相互理解が大切だと説明してくれた。彼が言うには「現地のスタッフと同じような生活をし、心を通じ合わせる事が大事。いくら頭で理解できても、実行に移さなければ意味がない。同じ仕事場で働いているのに日本人だけが豪華な家に住み、おいしい料理を食べに行っただけでは、チームワークがとれず、プロジェクトが成功するわけがない。」と語っていた。彼は、仕事の後、現地スタッフの引いている屋台を手伝ったり、スタッフの家にギターを片手に遊びに行き、みんなと宴会をしたりして、なるべく現地のスタッフと共に生活するようにしているそうだ。実際にここのセンターの雰囲気は、どこにも増して「at home」だったし、彼の努力の甲斐あってか現地スタッフが積極的に仕事をするようになったということだ。

宗教、文化、習慣の違うこの国にいきなり日本の技術を、日本人が日本の手順で彼らに押しつけたとしても、理解してくれる

以前に受け入れてもらえるはずがない。インドネシアの国を知り、人を知って、日本のことも現地の人々にわかってもらう。この相互理解があってこそ真の国際協力が成り立っていくのだと僕は知った。

バンドンのチコレ牧場で女性の協力隊員が活動していた。小須田美雪隊員だ。彼女は獣医としてその牧場の衛生面や牛の医療面に関与しているようだ。インドネシアの女性の協力隊員は男性よりも数が多く、それぞれが辺境の地で一人でがんばっているとJICA事務所の説明を受けていた。実際その中の一人と出会ってその男性に負けないうたくましさと熱意に、僕は深い感銘を受けた。

僕は彼等の仕事場の様子を見てきて、改めて青年海外協力隊というやりがいのある活動に「自分もいつかは…」という思いでいっぱいになった。

昼間、協力隊の活動を視察した後、夜には村での生活が僕等を待っていた。

村での初日、僕は村に着くまで、言葉や習慣のちがう彼等とうまくやっていけるのか？という不安で押し潰されそうだった。しかし村中の人々が集まっての盛大な歓迎パーティーに、不安なんてどこへやら飛んでしまい、逆に「彼等ともっと話がしたい。」という積極的な気持ちが強くなった。だからといって、言葉の壁がなくなったわけではないが、言葉というものは、どうにでもなるもので、心で相手に「わかってほしい。」と念じながら話せば、単語をただ並べるだけでもだいたい通じる。だからこそ相手に自分の言いたいことが通じ



たとき、また相手の言うことがわかったときは、うれしくてたまらなかった。村での生活は一夜一夜が瞬く間に過ぎ去り、あっという間にサヨナラパーティーの夜になってしまった。村の高校生ともやっと仲良くなったばかり、純白の心を持った村の子供達がようやく僕になついてきてくれて、僕も村の様子に溶け込もうとしている。何もかも、これからというのに、お別れというのはつらい。

僕はまだ彼等と話をしたいことが山ほどあった。日本の学校のこと、僕の家族のこと。しかし、時間はむなしく過ぎ、話したい聞きたいことの半分も残してお別れの朝を迎えた。

僕はこのあふれんばかりの感謝の気持ちをうまくインドネシア語で説明できないもどかしさと、さみしさで、涙がどっとあふれだしてきた。昨晚せっかく考えておいたインドネシア語のお礼も言えず、ただただ「terima kasih (ありがとう)」をくり返すことしかできなかった。バスの中でも、村のことを思い出す度に涙が出てきて、止まらなかった。協力隊の方が言った「日本に帰っても、インドネシアが恋しくてしょうがない。」という言葉がこのときになってやっとわかった。



この一週間で僕が得たものは、「郷に入っては郷に従え。」の精神だ。これは村人との交流から、日本の青年海外協力隊をはじめとする、あらゆる国際協力において考えなくてはならない、一つのモットーだと思う。また、この貴重な体験をこれからの僕の人生でただの思い出にするのではなく大いに役立てていこうと思う。

最後にこの事業の関係者のみなさんとパシールカリキ村のみんなに、「terima kasih」。(ありがとう)と心を込めて言いたい。

## 第4回体験事業を終えて

訪問団団長 小城善政

自らの意志でこの事業に応募した多数の中・高生が、作文と面接に挑み、中学生4名・高校生4名・専門学生1名の9名が団員に決定しました。団員と同行者はこの事業目的に沿った成果をあげるべく、アジア・太平洋農村研修センターで行われた1泊2日の事前研修で「なぜ国際協力が必要なのか」「青年海外協力隊とは」「インドネシア事情」「インドネシア語」等について勉強をして本番に備えました。

出発の朝、空港での結団式で、団員はインドネシア語での自己紹介と抱負を述べて機上の人となり、不安と期待が交差する中、初めての外国インドネシアに全員が一步をのぞきました。国際協力事業団インドネシア事務所での説明や、ジャカルタ市内での各所見学で全体像をつかんだ団員は、パシールカリキ村に到着し村民あげての大歓迎式にのぞみました。今迄の不安と緊張は村民の笑顔と心温まるもてなしで完全に消えていきました。

JICAプロジェクトや協力隊員の活動での協力体験・隊員との懇談会・現地高校との交流会そしてホームステイしながらの村民との交流に、団員は臆することなく積極的に取り組みました。一週間のインドネシア滞在で、団員は多くの事を学びました。異文化に触れ、国際協力について学び、価値観の違いを認め、相互理解の大切さを知りました。この体験が大きな財産となり、将来生かされる事と思います。

最後にこの事業の実施にあたりご支援を賜りました国際協力事業団・青年海外協力隊事務局・国際協力事業団インドネシア事務所・バンドン現地隊員又、パシールカリキ村の皆様に感謝申し上げます。

---

アパ      カバール      デサ      パシール      カリキ

*Apa Kabar Desa Pasir Kaliki*

第4回 鹿児島県青少年海外協力体験事業報告書

編集発行 鹿児島県青少年海外協力体験事業実行委員会

平成6年11月1日発行

---